



中村俊定文庫  
文庫 18  
290  
1



長安文集元亨秋書  
 延宝  
 集編ありるを  
名とふむせしめりこれハ延宝ふはまり  
く寶永ふ終るその間五んをわらふ  
きむ故ありしあるふ晋子の滅後  
ふいつてきれ人乃家ふ何りともあれ  
とてきしも正徳より今延寶子まで  
ふにも又五んを終りき何までその名  
乃久しききえんくけ集れ世ふがれ  
なむゆい又園ゆらむくき





百萬坊音原



五元集

延室

貞亨

室永

天和

元禄



室晋齋ハ米元章の硯の裏に  
鐫入るる号ニ三平子其硯  
を予不何しん室晋子や  
此を以号するくかたりと  
筆するに述ぬるをやくし  
中玄龍の額を需てるりの

軒葉よりけり  
庭窓よりけり 桃青門より  
より室の扉の百歳をよめ  
いりるよきり

具角

五元集

四十の賀一はる家まで

佛秘の墨を抄せて梅

庭大音る

んめりやと食の家も歌う

加列小松観音寺奉納

梅のふ且那を待つ庭あり

芭蕉のゆめうけもの

うりて繪襦をよけり

せめてのふと柿よんめの

曉

をよみ圖をりあてやむめのふ

不曲亭

あせを結目あても梅の匂は

こつとりとほのていおふ藪の梅

あつりしち枝のこけ目や梅のふ

宰府奉細

守梅乃夢のつらこ野老賣

和心水推敲之句

そくく梅よる月みけり梅の門

梅津氏 如祖又大坂

表の軍功より

御恩状 沸た刀をた斬

せし海正月十七日のおとや

伏井上枚隊にたすまの家臣

十七人としあのぬおつて

とも正月十七日後岡の旗

向る其常家督執権と

けあの髪存あり

幡おを文臺服やむめのふ

元り高嶺岩ありし  
の  
を  
祝  
ふ  
と  
り  
あ  
ら  
ま  
し  
の

夜光る梅のつらや貝の玉

仙衣を故守との甲より  
力あらしむひめ玉を  
佛梅やとらふと

外様と手向の梅を梅こり

元祿十三年二月九日

聖廟八百嶺 御年忌能  
為 主御社 御事 連 誂 令  
興行一社

梅松やあむむる数も八百所

氷肌玉骨と

昔より花のあもは梅の皮

久松肅山身よ

梅字くち岩の星乃白よれ

百八の国を遊や園の人や

芭蕉庵をよめて

号や十日をこも甲一んめ

くつんあよ素教ん色にあや

腕押のちせあふくは梅乃名

常木此わいと是あやこの梅

号のあを並りはつひん

止五陽



うらやまといはるる人杉淡

茶白のふゆのつゆ

雪のしらを色をあらはるる

茶抄まゝのむらぎのつゆ

うらやまの曲なる枝を削る

雪ふふあつとこ ちかかへる

うらやまのを詠ふる礼

市隅

竹のうらやまのつゆ

うらやまのつゆ 雀子のつゆのつゆ

長崎のつゆのつゆのつゆ

とてあつとつゆのつゆ

佛をうらやまのつゆ

うらやまのつゆのつゆ

うらやまのつゆのつゆ

うらやまのつゆのつゆ

お母のつゆのつゆ

正月巳巳布施のつゆ

詣つるつゆ

玉椿屋とみくつや布施

梅津硯水會子

窓押やれと扱ふころのぬたあや

五月廿七日冠里公に侍

葉刻之の上子を扱ふ蕨の家

接木を画て

木おせるのや継ぎやふん

十一日

お汁粉を還城樂のこもとけ

糸清く不帯みせせや二葉

漸覺春相泥とらふ切句

削りけ膏薬ぬりの鼻にあれ

畠のうら流中よあさつあつ

ニんーつりのりけおふ

あつそふ高うらもとふこふ

百人の雪搔志しし芥やと

五葉志ししものも朱雀の柳と  
ゆり所々のりまを

きひひこハ西の虎みおひさり

とけふも龍ま旬つる芥か

七種やぬせふ舞の松と

あけや下流よこりき お鳥

砂植のあき葉もあしりおしる家

河別八尾  
姫

溪邊双白鸞

浦の鸞芥梳は流りか  
うすく氷やうらうら嘆る芥のふ  
一糸ハかろき海より 帆が  
石下清なる法やむす規  
白魚や海苔ハ下迄の買合せ  
りふや海草と海苔の口の味  
白魚の漁翁の齒のあいだ  
白くさの習ふ何うはひたり  
陽をや小磯乃砂も吹くん

あつこい

こたつこいも女房もせん水祝

衆衆入懐の夢をひらき

引つては松をくいのちの氣をか  
寶引小切年の角を多くせ  
帯せぬと津波をいほ 踏まの宴  
程は人神の糸をわけてせん  
向を草海中に大黒殿をい  
はめりせもを標をいよつ返り  
年神は標の口をく小推りか

三月正當三十日

昼成

山吹も柳の糸ははるこみ  
鼻よりおとぬ目鏡や臙月  
禮うや太神宮へ一つも  
宿る宿りや天氣定めて種下

格枝縋馬合々

こよ〜斯る虫やえ〜り 稻荷山

禁固ヲ破リて暇ヲ玉ルコ

破や見惜い銀杖父乃の光

やあ入やそれいふその是る星

ゆるき

故赤穂城主淺野忠府監長矩之舊

巨大石内藏之助等四十六人同志異体

報亡君之讎今茲二月四日

官裁下令一時伏刃齧屍

万世のはる〜り 黄舌杯ひる〜

肺肝を〜〜ぬく

〜〜のさみげ芥子酢ハあ〜〜

富森春帆大言子葉林傍竹品

これ〜〜名ハ焦尾 琴も〜

あ〜〜けるこ

點印半面美人の字を彫て琴形  
の中ニ備へたるをばしを冠里云の  
万白の布卷ニ押弘と傳ふとして

春の月夜子あ書はしぬ

悼後立巻 初音ハ女

背くれ初音三村さまたる

題水

ちく万河を以水や夜の髓

画賛

拾はの風巾ふりしむや玉篋

あふけお席る水くふる寺

茶納

金柑や色青よゆいも 稻柿山

蕨入やしらあはるうや等

やあひや牛合 色く大系を

元祿丙子のしむ月まつま  
海舟うりし出山するあまひたり  
富中の梅のわつえは古を斗  
あつ蛙のかきもてんつけて賤り  
草茎なるくしとおくはる

草茎を包む塔もあき雪下り

坊牛豆とばりり 柳 くら

御忌

人の世や乃らうある日流るる林

本多徳品公まで

まはあやまげの鞭のゆめはう

あつ川波舟

あふ六柳りんりり百中を

柳一ふ敷もうすまのあ

搦干や柳の曲をつつふ 担

市川女中追善

一子九翁名成つき侍るふ

塗麩の足ハあうや雉の色

菜苑

黒地麻てこをあぬり土糸

まゐるやひきあのあは柱はに

鳥籠ありさう

園の春のちうあいにさか梅の袖

新三十三間堂

名抄や平のよの翁にも未始

青柳子梅梅つこみ々々々

柳上流の園子

はるさ梅子梅の影さか柳子

紙城の賢あるふけ柳の春

春雨

鏝り立してつふ、雪の雨あふ

はるさ梅子梅の影さか柳子

二月廿五日、上京参り

西川の死出流を旅のちうあ

はるさ梅子梅の影さか柳子

佛若大晦日入瀨ぬに  
ひうふ仏ともいふや  
へきうふ家世のこめさ  
往生もあのみあな  
佛もいれくうの花お月おめ  
山里の名もあつしや佐指法  
神尊の盆とんまり助先賣  
と丁あうま色大おの里ひり  
野嵐のこれさくらあひく  
竹のまや柳をるな落のさ  
梅のさけしよさあはらう

二月十七日京驛

了生の漸都のちまひて巻ん  
おぼらさか松の黒さよ月おめ  
難焼の比を郡の居を回て  
一指よ玉子をさる人  
あつしや音の玉あすもあむ  
京都の阿そふ雨  
傘や新のぬの阿そふ

無車馬喧

夕日新阿やあむこてあ



見獅子伶有感

了らるや柳子の歌の君とし  
蝶とも心猿をもよほし系を  
葉層よりもをいばほしこころ

新菜

聖堂のこほせく蝶の祿の  
百とせらぬら葉乃こころ

柳燕圖

しるめををうこらに柳の  
茶のあはをふあしと里蕨  
燕やかろく菓を由凡中

画りし

階子うらとあはすあつた  
海面の虹をけりまはるはめ  
傘子城がさうらぬ事燕  
暎やひをうあられと夕日  
うつらと影く雉の張らふ  
くらと雉をさうむる大の壺

角田川よして

あけの身子を忍らう雉乃を  
海草すく水の急すめ都を  
小田の嶽も柱やのこはる

高のこゝろつ時江北星の教  
ちんちん蝦もそめる洞うふ  
帆柱のせみよりちんちん雀外  
苗休や度江はほる。暇傳は  
とほおらし俵子海寸小橋外  
景政り目ちひち小田蝶うか  
み北政もくくゆる子  
孫も乃蚕やしあ小日向外  
美前や葉のまよ酔ふの尾流

治世若城千運留し  
錢ののりあしを恨むる  
よしはくはくしふ  
おるあや嵐りに世とも叶席  
上村千羽伝意くく  
乃春や花を越つ乃忘貝  
富士乃鈴子のそまは侍り  
三帆船ハ塩尻のたまるは  
かをあきりしら梅乃小枝子  
贈のあまをかんちそく  
白をすあけるつあて  
梅の名をくしんや贈のやめ

いせのきしき  
夕げとあはれ  
馬も出る子を御門や傀儡師  
傀儡師の頃の鳴き声は小鳥の

四睡圖

うけりあまぬも新くや虎の耳

三品小酒井村執音守綱

おき論や新もこの辰春日籠

或るもふ新く比年とを  
任持のぬけりあはれ  
任持のぬけりあはれ  
五ツの雀を感は

能睡 煖か所嗅出たぬあふ

能忘 かりと老七月かたの雨

能捕 勢りと氣の味を回ては

能狂 陽空と志きり子おるゆ

能耽 籠のあるあやまると花心

自注

蝶を嗜て子猫を紙る 心づか

足跡をつまらぬ猫や雪の中  
猫の子れくんとつたれつた蝶の

市間喧

片げ本意の身あはるは雨蛙

を狂酔帰のたを影の内せ

おひあふん 春の夜の女とふ家くすあふ

宰府系譜の舟中

葉のふ乃小城を小舟あふり

醜子桃李のるく 乾白

鶯の柳ふまはるく 逆毛か

壬子申水もたはれて

あ唇を鳥帽子あふせん 若く

曙やまに桃李の鶯の声

初はる小橋や妻あ枝の脇踊

はるく牙を雛の宝や延表 袴

たてのこや盗まぬ雛ハ松浦舟

おはるな木もあふ雛を炎

雛やまの基盤よ、おろしけ

三日月の甲の香りけり

ひあやまの佐野の只りの香の袖  
風のひあ清水坂を一目の南  
折菓子や井筒をぬて雛のしげ  
雛の子は宮服くみゆしける

永休島八幡をまかり

汐干やまをうらふとまれ次第貝  
おろしむ比目を踏ん汐干や  
純國の朝陽つとまを汐干りふ

第貳

もろこしや雛子菊く小盞  
曲あ子所の氣違ハ茶碗や  
菓子盆よけし人形せ桃のふ  
曲水や寛海くはる宿なるも

綿よりして福ひおさりり雛の息  
くり云を雛古懐か虎の母  
雛くれせ人を初夜の後姿か  
緑豆の尻も白く桃の眉

須弥ハよふおむやより合  
貝そろへをさうしりお  
蛤のくもはさむら 西柳

水落云あつてく 水落養の比  
たあんけのなまらうきよー  
仰あつて 観世の御書と  
あつてけり

脚息な何のふおれと山旅中

露沾公御度とを

森ゆらよ又うん月のお梅  
振うらこあつて思ふ花の庭  
地那やむのかよふ松さうり  
花をん母まつれらる盲児  
いさくろ小町々婦のなり〜に

黒谷まで

万のふらねらつた花 逆橋

仁和寺

いふ戸のまらぬ女 梅山

上野まで

涼師で扈從さんより梅も

妙鏡城より花送をい

文の初は梅片一毛に傳は

花中尋友

饅頭を人をもつる山梅

一巻を被上り招れて

初梅天物のつらさ女をせん

友猿のたまきこひすか花夜

三月廿日 舎夷亭に

山あまふ 席巻一あり

市辺町や花のこあらさ

門柳花をばらめり

佛用より児うすか花の香

矮屋毒奴の膝をいりしのみ

傀儡の鼓うつむる義経ん

表中帛  
面上右西湖

石河氏宜雨公の山居  
羨景を仰つちて四方の四の  
人情を以てあしめしむる

二節の乃ハ角豆り山居

護國ちりりあそぶ時

さしをむるさき

白雪やもよみけり影ハ嬌嫩

立ちをあらはす

片身にありく主とわんを花衣

京よりくまらん

花よ遊て就運よましく都の

度よとすれ捧つて山をむ山

山根猿を放しと相のさ

もあそぶの磯よりあつて

礼多物物くそ友ハあつて

付産

礼ありと表書院を月代

屯子来と都ハ幕の盛れ

茶盛子てあるはし夫婦が

と如盛あつて踏まるとあ

世れあせ五年己あはるか



目黒松隣堂にて

浮世木を替りて咲き山片あり

越東殿山三寸

小節もや松よりくれば山橋  
八道乃山女さくらや一況に  
人を人を恋の染やとあよま

茅野山ありて

明星や橋片にわぬ山うら

杉より殺生偷盗あり

何とてと花子五戒の橋より

行房のふとて席座の花を語り  
けりてよーいおろりり花を

花をほん使老のおろりり花を

ぬき子万うを依りて

そのもよありてありてやあ盃

酒のけりありてさくら花を

ちけり清味みせを塩橋

惜花不掃地

恋奴ももいふお藤ゆるり

お存

さくらももいふお藤ゆるり

上野清水堂にて

清くけて去るも盛のちくち  
ちる花や露皮をへふる足の心

日論るの情と遊音のり

おも酒情とも信ん塩を

一食千金とくや

津必の何五あせん出くつ銅

辛未の春上野にあきつる日

門主薨御のよきおきて世に

一めし愁眉ひらめく

其弥生との二日そや ぶらく

花と清とこのすめく喧嘩買

上野御

わりて徒士ん立る此乃花や下

尋花

梅木屋の亭之留るこむいすい

遊者と清水に遊るて

車もて花んをらんや 東山

茶室をすせて山舎ん人を誰

酒を善善を毒の物らんうか

此雨よあはぬ人や 家乃豆

王維山水  
寸馬豆人

永代寺池巻

池を春犬耳入あり花の紅

南盛とくめて上京よ

花で濃伊勢を仕まつる裏物

大悲心院の花をえ侍りて

灌頂の園よりおてく梅小

茶もさひよはつて静を山裾

おとくも花の回乃せうねふ

坐豆袋や鈴子のと居初さく

ゆふの山を

梅を

海棠の花のうや影月

小鳥居ハ在亭の神りアし山

月香子の咲むの葉影ほ

亦是より亦玉一尺持つしハ

菱咲を襟く小日をかえ(たり

且夕おちしおちむるはし州

おれつり艶やふる菖の桐

心ち守り序終らんども岩つ

よ伝あらんぬ石の五徳や菖其房

白菖を酔みとまつふそち

河州川遊記

親のまは山は乃流や志はあふ

錦の中は風の風と晴くし

三月十二日合衆亭の花

あつ下庭はあつりて

植足小三切の供やふはく

甲く入相

けくと花乃名はあや笄扇

秋航座ちとあつりて

あつりてあつりてあつりて

龍樹菩薩の禪院加玉お新て  
貪欲を志めしめあつりてあつりて  
有瘡人近猛煙塔雖悦後増  
苦の久のあつりて

雁瘡のいゆあつりてあつりて

十新止観子

一目之羅不終はる得鳥之羅

唯是一目はあつりてあつりて

あつりてあつりてあつりて

意馬心後の解

立馬の口を積はあつりて

雜司名考

松の白くあはれ  
三つとまへしあの  
おろしゆのまを

山里ハ人をうへしの花ん外

口の三浦云侍従あをりて

室永二年三月廿七日ふ

京使よりあをらぬを祝ひし

後原やれ七人茶屋より

芭蕉の自画十三徳周之讚

柳の枝乃十字志んし柳陰

あをらぬあやねをききあも時智

者ゆり面起すやちとくおん

淀舟のあもしふし 龍云

夜這星のあもしや子銀

官城

歴こや下るのあしし 時智

河東

川おろしるるあへり 子銀

越啼やけあふすを 郭云

霞の糸雨をけしあ 郭云

石間長巻子

何人の傳へんと下流亦  
不親一二の橋乃其流系  
既成の三味線走り何を

竹廊

時をあつて子傘を買せり

赤折山

夜丁と子け様あつた鼓筋  
きねこの用さ日月の時を  
寮坊主のお子ハ麻 ちとた

庐山雨夜

宰府子納

卯を子守を居くと越子り

林中不賣薪

せよふくや山時を所をうそ

けり江やよ村あり

くまの村場の日陰や 時を  
禁る五加りおくを何とま

曲鏡人不见

鏡の反吐いさあり 歌と  
時をりれや崩おひくはきん



あまの心を馳走ふ寝ぬおれ  
目の上の目をくくや 子規

夢昼

砂の目み福芝を流し給ふ

姉の噂の野史忠切孝心を

子規のふりて禄をぬりて

うらやま世にまこと信じて

起てきけけ何事市云お記

佛さくこの世にふくみしを

志しつるやけあいにせれおん

夢醒や母よきうせして仏に

風光別我昔吟身

大酒よ起てまのうき給ふ

神居をよまぬさくきや衣更

一ころりよ給ふ風や黒木うき

卯月八日母よおくれて

かみよりて衣入るまこ月以

慈母墓

初め子うわしあつるあま

上りさ

灌佛や控ふおれさあ思



あぢきなきよ

年寄うーワとらるるのあぢきなき  
殿つらり並ておやー桐のふ  
メのさあさ

うらぬのや異見み咽む牡丹  
いより北あはれその牡丹お

河原親心寺

楠の遣ぬるけーあぢきなき

筑前おを

あぢきなきの院まらる牡丹お

雨意 艶士のあぢき

ハヤをさうつーみあぢきなき

池田の梅葉子有柏のた状を  
あつめて集あぢきなき

さしてりし用あぢきなきにさうさ

下流卯月お中の一日

隠岐殿のりーあぢきなき

あぢきなき百里全阿南登号  
上京のめ三十三日の吃斎

室承用元奉替使  
序作美の人のあまて

とーん氣て伴せと誰うあぢき

屏風みま房に位すつるの衣  
送ひ子共三位よあしめる

長崎屋原なる家は紅色来  
貢のふく奇なりとて

桐のむ新度の鷲詣 不言

愛娘子

鶉啼て玉子吸蚊ハあつる

席令初めし上糸の饒

涼を都のそくや 連を金

揚別霍

護国寺よあま

水漬し目こちやや 牡多

うすつりし琴くあふ二河位也

紫の襟も何りきりきり

いさおけあし提束家杜ふ

牛細

いゝれ所おやうけて在ふ

田家

あこめよ足何りそ娘さる

け獨よ笠のつくやあ田家

木質入湯のころ

まろ〜とやお苗のうらむさるのり

袖裏や茹かりけお白くま  
舟より北均を吹や夕暮あ  
卯あや蛸〜ふのたひくす  
ふのあやいつまの津所のかげろ

寄幻听長老

老僧の筭をかむふ〜  
筆と竹ありかろま大阿ん  
竹の尻を折る筆や五月間

腰下無寸鉄

筆や丈山あまの 鎗の鞘

素堂居

叶もろ戸ハ皆喰ものそまの叶

楓子居

其叶や家ハくれて湯用草  
夜ふや橋基えして何通り  
目通の罨の棧や築はくひ  
吐ぬ鴉のちあふよもあ海山  
粉もつれて一里はかり岡の松  
争たぬ忘れ耳やうらふを

戸録部伝らふ

禊祓の初ハ己日の夜者ハ  
帆をかり舟ハ襦袢を穿れ  
夕塔やおのるまあり中か  
あしすり通る時

世甲をきくはこい小藤うと  
飯部の體あつて都か

和を讀よ

伊せあても松魚あはし酒定  
こよりきこの名ハ昔まをうぶか

呈高江公饒

簾木や人言へつる五月  
はこれれや是のち外を通る人  
顔むら田子のもよもや五月  
片うこれれや土の煙乃を穿れ  
むらむらや傘あはる小人形  
さこれる酒勾てくさる和菓子

巖窟院殿乃大法るを

東叡のよね三巻ル

夕りおのきも休むり法の色

市譯吟

る舟とわらる 輕やけのを組  
るあやめののほりむらるるあやめ

公川中入時

あやめはくわらる 陸子乃こころは  
淺湯を沼になしる 菖くさ

りよせけああやめもあやめ  
うりくぬま宿ををあやめ  
やとくおほくぬ 危あはし  
新のくわらるあやめと伴せ大浦  
家のくわらるあやめと伴せ大浦

菖くさを 蛙のつらま あやめは

けあやめをさうくさ白蛇  
ニ毛の羽をさうくさ白蛇  
ちやんちやんちやんちやんち  
とのくわらるあやめと伴せ大浦  
おさあやめと伴せ大浦

新のくわらるあやめと伴せ大浦

五月三ろる月いあやめと伴せ大浦

屋根菖くさと並てあける菖くさ

ありありあやめの塔のくわらる

の毎の糰やせめて湯あく  
舟のくわらるあやめと伴せ大浦

本庄しし夕しを志めて昔水

五月十三日

雨をやはも酔日乃くあつあ  
藤のまじや金魚よりうらまふ

酒満

鳥のも乃酒典童子も二面

青嵐よりふ雲を

海松おまふ杉の花や初瀬山  
蝙蝠の尿もあふふれあやめ  
交代の葉守の津や初拍  
抱衣お何といおこふ懐か

緑槐 高處

ちのせまや 笛よは響をと十文字  
うらうら酒の肴も遠せたり  
漁舎やむしーの角下 時牛  
よのあてや 升よ生をうらうら  
文七あふありか 彦のうらうら

河原町あり

毒り家わらうらよあま告やん  
字作よそ

川くまや水よ二重のあうら

うらせこの繪よ

夏虫の暮あこくねらるる命

谷中

風あつた森のつらやうに

傍らるる君

候しらす貝少く借あらし智

下やとや姫根性のあくれ声

高江公溜池の高窓よ

あつたあつた涼を揺んとさき

夏ふよ我ハ御簾とるあつ

宇都宮入道

蓮生ハあつたあつたを虫拂ひ

樟脳よ代をゆつらその鏝うあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

浴衣着てあつたあつたあ

粗公 溜池あつ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

亀毛の鱗

此の皮笠ハ重どりにけり

破扇の圖

維光り扇をく持し扇は  
鳥飛跡の何れ子の何れ子  
紅よりちふのわさし白は  
せき啼や木のかりしる園より  
隣りくは木にくもやせよの亀  
竹のせきけらよ志何の時  
あうそやせよも雀も蛇を程

白雨の内候もあく物語り

巾着白雨とらぬ歌

あよ香もあつらふも腥  
白雨やあつらふもむねを菊の子  
巾着の内もあつらふもむねを  
夕立よひよりあつらふもむねを

中嶋三遠の神楽あそび  
雨をすりぬるあつらふも

夕立や田を足ぬるあつらふも

翌日雨あそび

舟中一瞥

けうに乃箱波の写りて里急す

うらみすうらみ



西行と師花村の馬山  
草花をたぬきつゝも  
見よくのたぬきあのたぬき  
土庫のりつゝもあひのたぬき  
常木の花をりつゝもあひ

鳥のつらむく人

青柳やつらむく花の色  
あつらむくや白き花根より  
野焼ハタをきつゝもあひ  
麻村や家をへつゝもあひ

或人の住者  
まはつて

夏のおも吉次り  
あのおも吉次り

生死去来

鳥のつらむく人

捕虎 未成

七ッ色の花をりつゝもあひ  
あつらむくや白き花根より  
野焼ハタをきつゝもあひ  
麻村や家をへつゝもあひ

更閑

石灯籠好座よ清ら物舟

しきげさよすんごうと  
うちをさねわらうさめてほ

切れり多ハ誠り 蚤の流

旅店

ふきの雪蠅ハ酒産子孫りり

あつん大あつんつを二あつん  
刻て蓋しつかいおさみのま  
内ハ兼み塗てちの口よむい  
をくせしむをのそむ

清水新衣、白う面子うありり  
形目鼻あきさくんのさくこ

浅草河歳と吟涼

舟人敷舟おれも了りては

川原之影子泥を言 旅りあ

涼まつお安夜や上端よ舟いあ

すーさや帆子船匠のちり焚

舟暑し酔うれめそく園の影

午んくまを欄干や橋はらん

涼ーさや先弟旅野の流星

舞退之捨酒吟あき

酒ちうは舟をうーやお涼あき

こぼるる

此碑て八江を哀まを虫か

牛御前

是や皆雨を吹人りすみ

橋上休老とらあ歌

半泥む老の齒くまや橋は

船を玉子てまなくあそみか

海を見て凍む角あま鬼尾

餓久松蕭山

筆をさしたるさやうあふ凍

人のままめ

あいら藤てつらり刺ゆあ

画讚

大虚境の布袋の持のゆく所

日松よあつゝあまを

十人の明神つまよはくみみ

河原あま

時を牛はくすまみ車く

は松よりさ風あり庭をみ

助あつ月あまあ 凍まか

遊子殘月

暑字 けなちよて

むら雨のち舞よ通る暑きよ

呈餞 露江石

供への鞘の暑きや園の松  
人また暑の影おと 端涼を

自棄

きろみろく物起昼寐のけし

五月十日 雷雨 永代島の

茶店平 やりし

ゆきより神宮町で 藪の蓋

住吉のそ 西雲 夫教 御坊  
せし 時よ 暮ん しの くれ

藪のあま 二万のの 輝あま

七十余の老翁 己のこりて 身を  
やこころく せおく けり 子よ 追  
善のちを ちける きの 善の  
いまのそ けり けり けり  
やん けり けり けり  
かりいよ けり けり けり  
なり けり けり けり  
ゆき けり けり けり

六尺も力のや けり けり

村思 菴り

年このを秋申江のる社も也  
てめあちる靈仏冥神一をを  
さうりばあ〜して興廢の所  
感概あ〜んたる中〜あを  
時の用情ふ所のの所て〜あ  
れを〜れて官督部三のさ  
〜い〜暑をち〜た霍  
乱虫氣のち〜あち〜増乃  
〜くはゆをけけ〜お行程の  
遠道をけ番〜り〜

ゆ〜と色振新水の下白乃

秋天あち〜

夕影あち〜けと賣名号

昼起よ米搦涼む多也  
故あのをを踏子〜せて讚  
の〜むあ〜その踏ハ又白  
乃多有書〜り〜たうい  
ゆるゆ〜自句を半ゆる

夕影や一白乃とすあゝの宿

逐歐陽公賦

蠅のよれ兄ひ辭あ〜り〜か

魚讚

船橋の小磯さ〜し〜車百合  
子共肩と〜つ〜と〜交早

市中方

魚市涼宵

楊貴妃の衣ハ治しる裸ハ衣

七月七日靈衣を感て

東湖の露方天は露伝ふ

出処多きふ欺くれし蓮花

荷切や下衣の切て菱角

要仙貫之の古魚よ

冠も指をそめり衣乃汗

衣院七毒をのこして

周女さくおや世をまの海

上下と裸の片髪みけ弁

あはれそのよりあさうは書

くらさあしさんせよあ

舞や麻の衣を垣根小

と本てすくあういし

すし軍海くわらな

さんおさませまの再ハヤ

増れや一をすくく如

鬼のやうあはれ神のく

くらさあしさんせよあ

呉例して何しのいよ

介抱せし世生のらていよ

いしんあもさるるあ

糸草も食養性や 瓜島

瓜守や 桂の生例

いよより

越前の人の土産をよめて  
其廣つものもわりの合供り

櫻のしんやふを祀て掛  
元角田川牛甲とらふよて

いそつと清あるこころまの橋  
舟跡よりついで

貫之の館のすゝりりまふ

さかひの二りを扇よるを  
生の松のういをよる

木曾のや涼の味を志し  
市原よる

虫とむと栲束のや町干ねり

1921  
2905

